

## 研究区分：予防に関する研究

# コロナ禍における乳幼児の成長発達への影響因子

岩本 美由紀, 加瀬 由香里

看護学講座 広域看護学ユニット

### 【目的】

2019年に発生したCOVID-19(新型コロナウイルス)によるコロナ禍は、3年間継続した。政府は2023年5月8日より新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけを「第5類」とし、人々の制限も緩和された。現在、人々の生活は通常に戻りつつあるが、コロナ禍で成長発達してきた子どもへの影響が危惧される。特に乳幼児は身体的・精神的に日々著しく成長発達しているため、このような環境の中で生活した子どもへの影響は大きいと考える。そのため各保育施設においては、子どもの成長・発達への影響を考えた柔軟な対応を行っている。しかし保育施設内での感染予防対策は必要となるため、保育士のマスク着用や、食事時の緘黙などの生活制限は欠かせない現状にある。そこで今回、コロナ禍が3年継続した現在の乳幼児の成長発達状況と保育士の意識について、また成長発達の影響因子を明らかにする。

### 【方法】

#### 1. 対象

調査協力の得られたK府内の公立・私立の認可保育園に勤務する、3年以上保育経験のある保育士240名を対象とした。有効回答数は232名(96%)である。

#### 2. 調査方法

自記式質問紙調査

調査内容は、保育環境、看護師の省察、運動機能の発達、社会性の発達、言語の発達である。全項目数は63項目で、4つの尺度の質問紙調査とした。質問紙の解答は「あてはまる」4点、「ややあてはまる」を3点とし、「ややあてはまらない」2点、「あてはまらない」を1点とした。

#### 3. 分析方法

統計ソフトIBM SPSS Statisticsを使用し、各項

目の平均値と分布、さらにspearmanの相関分析を用いて各項目間の相関を分析した。

#### 4. 倫理的配慮

本研究は明治国際医療大学ヒト倫理審査委員会の承諾を得て行った(承認番号2022-016)。各保育園の園長に調査の目的・方法・研究参加の自由意志・研究途中での拒否権、プライバシーの保護と管理、データの保管方法について口頭と文書で説明し同意を得た上で行った。

### 【結果】

#### 1. 保育士の背景

保育士の年齢の平均値は、 $40.91 \pm 11.30$  (平均値±標準偏差: 以下同様)、保育勤務年数の平均は $15.8 \pm 8.90$ である。

#### 2. 保育環境

黙食の徹底に対し、「あてはまる」と回答した保育士は35.3%、「ややあてはまる」22.0%であった。3密の徹底に対し「あてはまる」と回答した保育園は31.5%、「ややあてはまる」25.9%であった。

#### 3. 保育士の省察尺度

保育士が乳幼児と関わる際、「自分の伝え方について考える」 $3.71 \pm 0.47$ 、「子どもの表情や態度に注意する」 $3.55 \pm 0.69$ 、「子どもがどのように受け止めたか考える」 $3.61 \pm 0.57$ と、全て高い平均値が得られた。さらに「子どものこれからの成長について考える」も $3.59 \pm 0.55$ と高かった。

#### 4. 運動機能の発達

コロナ禍が3年継続した現在、「子どもは活発に活動している」は、 $3.49 \pm 0.70$ と高かった。運動機能においては「粗大運動」 $2.94 \pm 0.75$ 、「微細運動」 $2.79 \pm 0.73$ であった。最も変化がみられた項目は、「座位保持が難しくなった」 $3.08 \pm 0.90$ であった。

「座位保持が難しくなった」は「転ぶようになった」「遊びの際に疲れやすくなった」「手先不器用」「食事時の集力の低下」との相関がみられた。(  $r = 0.41 \sim 0.65$  )

#### 5. 乳幼児の食事

コロナ禍後の「食べ物への関心の低下」は  $1.89 \pm 0.85$  と低く、「食事を楽しんでいる」は  $3.24 \pm 0.81$  と高かった。また「食事への集中できない子どもの増加」は  $2.58 \pm 0.95$  , 「日常生活の自立の遅れ」は  $2.38 \pm 0.91$  であった。「食事への集中」は「座位保持困難」「手先が不器用」「食べ物への関心」との相関がみられた。(  $r = 0.41 \sim 0.50$  )

#### 6. 社会性の発達

「子どもの表情が乏しくなった」「子どもの笑顔の減少」「子ども同士のトラブルの増加」の項目はコロナ禍前と比較し、平均値に大きな変化はみられなかった。しかし「保育士の目元を意識する」は  $3.08 \pm 0.94$  , 「子どもへ感情が伝わり難くなった」は  $3.17 \pm 0.85$  「マスク着用による顔の認識の低下」は  $2.76 \pm 0.93$  であった。

#### 7. 言語の発達

言語においては「発音」「滑舌」「言葉の発達」ともにコロナ禍前と比較して大きな変化はみられなかった。しかし「言葉の発達の遅れ」は「保育士に対する反応の低下」「子ども同士の会話の減少」「発音」との相関を認めた。(  $r = 0.54 \sim 0.85$  )

### 【考察】

今回の調査結果より、黙食と3密の回避は保育園による差異がみられたが、外遊び時のマスクや行事の制限は徐々に回避されていることが明らかになった。また現在乳幼児は、保育園において外遊びなどを通じて活発に遊んでいるが、運動機能の発達への影響がみられた。運動機能においては、特に「座位保持が難しくなった」の項目が高く「疲労」「不器用」「転ぶ」「食事時の集中力」との相関がみられたことより、3年間のコロナ禍生活による体力面や精神面への影響が考えられる。社会性の発達について、七木田(2022)はコロナ禍において保育士が感じている乳

幼児の精神的変化として「泣いて訴える」コミュニケーションの変化として「表情が乏しい」を明らかにしているが、今回の調査においては大きな変化は見られなかった。先行研究による調査から1年経過し、現在コロナ禍による規制が徐々に緩和された影響によるものと考ええる。

しかし、「目元を意識する」「子どもへ感情が伝わり難くなった」との傾向はみられていた。郷田(2020)は「怒り・恐れ・驚き・悲しみは顔の上部の効果が強く、嫌悪・幸福は顔の下部の効果が強いことを明らかにしている。感情により強く表れる部位が異なるため、保育士のマスク着用による表情の読み取りが難しいといえる。特に乳幼児は、精神機能の発達過程にあるため、マスク着用による影響を受けやすいと考える。

言語の発達については、大きな変化はみられなかったが、「保育士に対する反応の低下」「発音」との相関がみられた。保育士のマスク着用による聞き取り難さや、乳幼児の発達の特徴による影響が考える。

コロナ禍で3年間乳幼児と関わっていた保育士は、常に自分の言動を意識し、伝え方を考えて乳幼児に関わっていた。また、現段階だけでなく、将来を見据えて関わっていた保育士の姿勢が、乳幼児の健全な成長発達に大きく影響していると考えられる。

### 【結語】

1. コロナ禍で3年間成長発達した乳幼児への影響として、「座位保持困難」「疲労」「不器用」「転びやすい」といった運動機能や、保育士のマスク着用による「感情の伝わり難さ」がみられた。
2. 保育士は、現在だけでなく将来を見据えて、子どもと関わり、自己の行動の振り返り省察していた。

### 【文献】

1. 七木田：「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化」-COVID19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察。比治山大学紀要, 57 : 17-26, 2022.

2. 郷田賢, 宮本正一:感情判断における顔の部位の効果, 心理学研究, 71, 3:211-218, 2000.